が國に於ける補陀落信仰」、「わが國に於ける彌勒信仰の一發現」等があり、史料方面の研究には「明集進行集とその著者」、「上宮御製疏」、「最近に於ける教行信證の史的研究」、「鞍馬寺の銅製置燈籠」、「淨土文類集について」等がある上に「明惠上人歌集評釋」、「奈良朝時代に於ける淨土教文學」の如き文學方面のものや、「弘仁貞觀期佛教美術の一瞥」、「東本願寺の親鸞聖人傳繪」が代表する佛教藝術のものもあり、更に「親鸞教團の組織」、「報恩講の起源」、「タヤ考」の如き、眞宗特殊の社會と佛者との關係を見たものもあつて、佛教史より見たる日本の文化の各方面の史料が含まれて居る。中外出版株式會社發行

【以上中村】

●日本文化史研究

文學博士　内藤虎次郎著

本書は著者が近年史學地理學同攷會其他の求めに應じて各處で試みられた國史に關する講演の、雜誌新聞紙に載つたものを蒐集して印行されたものである。今之を繙讀してみると、全編に渉つてよく本邦文化の由來と本質とが究明されてゐる。就中、「日本文化とは何ぞや」の編に於て、我國の文化は最初から存在し、それが外國文化を選擇し同化しつゝ今日の發達を來たしたものと考へるは大なる謬想で、支那の文化の力によつて徐々と形成されたものである。而して我國民に思想的自覺の生じたのは蒙古襲來が最大動機をなして居り、支那に對し思想的にも藝術的にも完全に獨立したのは漸く最近の事である文化的反動が今や日本より支那に向つて流動しつゝあるのであると論じ、「日本上古の狀態」に於て、古來我國史界には本國中心主義が主となり、外國の材料に依つて研究することは務めて排斥せんとする傾向があるとて上古史について種々論述し就中倭國及び委奴國に就ては、前者は少くとも日本の西半部全體を意味し後者は之を大和朝廷と解すべきであると論じ、「近畿地方に於ける神社」に於て平野神社兵主神社の祭神は外國の神であるとし「日本文化の獨立」に於て、後宇多天皇の頃から南北朝頃にかけては政治に於ても學問思想に於ても一般に革新機運が漲つて居つた時代で、此頃に起つた新思想は德川

時代にまでも及んで明治維新今日の日本を形造る根本になつたのであると論じ、「應仁の亂に就て」に於て此の亂は全く日本を改造させ、思想上に於ても將た亦智識趣味上に於ても、今迄貴族階級專有のものであつたのが一般民衆的になる傾向を持ち來つたのであると論じて居られ、其の他全編に涉つて著者の該博なる智識と透徹せる史眼と因はれざる論述とは大に傾聽すべきである。

（菊版本文二六五頁、京都弘文堂書房發行、定價參圓）

【松野】

㊀今世中國貿易通志　陳重民編

本書は信據すべき統計に基き支那對外貿易の內容を叙述し實際の參考に供せむとするものにして、第一編は輸出入貿易の消長、各開港場貿易の概況、船隻航運の盛衰金銀現金の出入等對外貿易の大勢を叙し、第二編は輸出貨物の產地產額、輸出統計、交易の習慣、外國に於ける消費の情況を記し第三編に輸入貨物其の產地の狀況、輸入統計內地にての消費並に市場に於ける競爭の實況を謂ふ、統計は民國九年迄のものを用ひ、海關華洋貿易、農商公報、外交公報以下日本人の編述に係る十五種以上の諸書に基き記述せり。（民國十三年四月刊、商務印書館發行價大洋二元五分）

㊁支那當代新人物　清水安三著

本書は北京週報主筆として支那の新人に接觸し其の風丰抱懷に親炙する機會多き著者が在支宣敎師の獻身的努力と在支外人の支那研究に熱心なるとに動かされて支那當代新人物を紹介せむが爲に執筆せしものにして、施きて現支那政界に於ける事情を叙し、宣統帝、黎元洪、曹錕、張作霖、吳佩孚、馮玉祥、王寵惠、汪榮寶、章鴻銘、柯劭忞、康有爲、梁啓超、胡適、陳獨秀、李大釗、李石、曾孫文、蔡元培等諸氏の事情を叙し、甚だ便利なる書なり（東京日本橋區數寄屋町大阪屋號書店發行、四六版定價貳圓）

支那新人と黎明運動　清水安三著

全部十三章より成り緒言、孔敎改革と新儒敎、思想革命と新憲法、文章革命と其將來、漢字革命と新字母、學